



卒業によせて～校長式辞より～

豊かな山河に抱かれ、心の旅とおもてなしの巡礼の町、ふるさと二島に春の息吹を感じる、今日の佳き日、多数のご来賓の皆様のご臨席の下、「第72回卒業証書授与式」を挙行できますことは、教職員一同、この上ない喜びです。

卒業生の保護者の皆様におかれましては、多感な中学校三年間、親としての喜びだけでなく、戸惑いやご苦労も多かったことでしょう。本日、立派に巣立っていくお子様の姿を目の当たりにされ、感慨もひとしおのこととご推察いたします。このように、卒業の日が迎えられるのも、日頃から教育活動やPTA活などにエールを送り続けていただいた皆様のお力添えがあったことと、深く感謝申し上げます。

卒業生15名は、この一年間、リーダーとして下級生を、そして二島中学校を引っ張ってくれました。少人数であるということを手帳からよさに変換し、そのよさを地域に発信してくれた様々な姿が思い出されます。特に、合唱に向けた卒業生の意気込みは下級生がしっかり受け止めており、芋掘りでのサポート精神は、巡礼・おもてなしの町にふさわしいやさしさの風を運んでくれました。

本日、晴れて卒業の日が迎えられることは、このような本人達の努力の賜物であります。多くの方々から支えられたお陰であり、特に、温かく見守り続けたご家族の存在があったことと、感謝の気持ちを忘れないでください。

さて、社会に目を移すと、高度情報化による便利な世の中と逆行して、人口減少をはじめ、国際的な紛争や地球規模の環境問題など、大きな変革の時代を迎えています。それは、今までの価値観や生活に明るい光を指しながらも、暗い陰を落としています。このような時代だからこそ、15名のみなさんには、「未来を切り拓くための人々の足下を照らす灯り」となってもらいたいです。

元住友電工の田中良雄さんの「私の願い」と

いう詩をご紹介します。この詩の一隅（いちぐう）とは、片隅とか置かれた役割や場所などを表しています。

私の願い

田中 良雄

一隅を照らすもので私はありたい
私の受け持つ一隅が
どんな小さくみじめな
はかないものであっても
悪びれず ひるまず
いつもほのかに
照らして行きたい



田中さんをよく存じ上げませんが、とても素敵なき方をされたのだろうと想像します。

この「一隅を照らす」という言葉は、天台宗の開祖最澄の言葉を引用しています。「一隅を照らす、これ則ち国宝なり」お金や財産ではなく、家庭や職場など、自分が置かれたその場所で精一杯努力し、明るく光り輝くことのできる人こそ、何にも代えがたい貴い国の宝であることを示しています。国の宝とは、地域の宝、家族の宝、会社の宝をはじめ、つながりのあるもの同士の宝と読み替えると、より身近に感じられます。さらに、片隅を照らす存在は、多くの人々の足下を照らし、その心の闇を消す光となります。二島中にとって、卒業のみなさんは、一歩先を照らす灯りであったと誇りに思います。

自分が精一杯輝くことも大切ですが、自分の足下にあるものと向き合ってみようとする謙虚で懐の深い姿勢は、あなたのまわりにやさしさと品格をもたらすでしょう。

次のステージにおいても、未知の航海にたじろぐことなく、勇気ある一歩を踏み出し、思い切って人生のかじを切ってください。

ご活躍とご多幸を心から祈念しております。

